

浄土

monthly
JŌDO

2012 1 January



駅

をめぐる
点景

絵

2012年の表紙

村上健

弘南鉄道大鰐線 中央弘前駅

弘南鉄道大鰐線は、青森県南津軽郡大鰐町の大鰐駅から青森県弘前市の中央弘前駅を結ぶ弘南鉄道の鉄道路線である。1952（昭和27）年に弘前電気鉄道が開業し、1970（昭和45）年に現在の弘南鉄道大鰐線となった。

駅数14。すべて各駅停車の普通列車。かつて朝は30分間隔、その他の時間帯は45分間隔で運転されていたが、2009年、日中以降は減便、運転間隔は60分間隔に拡大した。

義塾高校前駅、弘高下駅、弘前大学に近い西弘前駅の3駅があるため、通学の足として、また大鰐温泉への直行便として利用されている。

1月

東京・五反田

専修寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



専修寺本堂の落慶式は平成20年4月28日に執り行われた。その本堂を背景に、右が加藤亮哉専修寺住職、左が甘利直義専修寺副住職





明るい本堂で毎月1日には園児が正座して仏様を拝んでいる



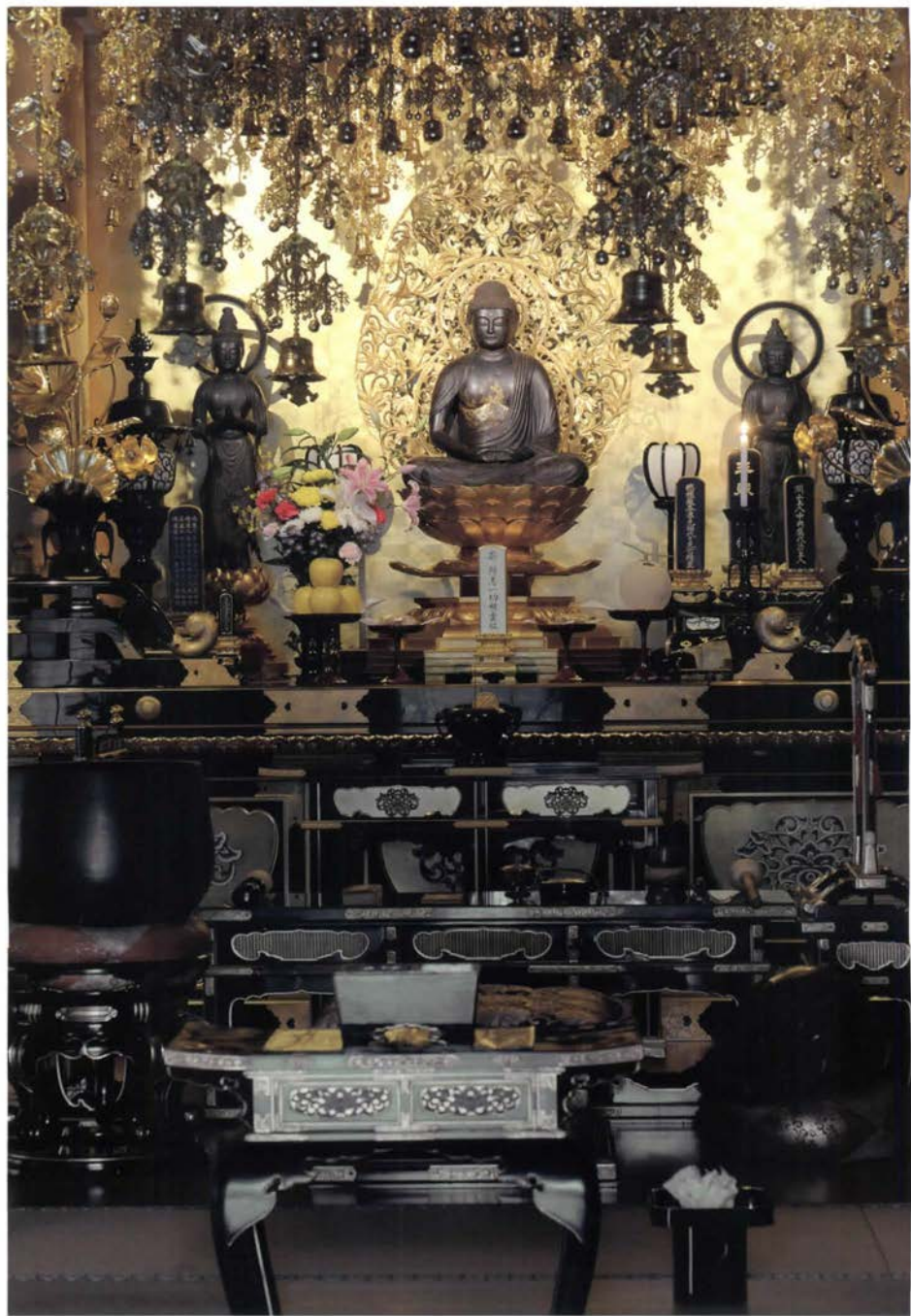
客間のとなりにあるお茶室。
床柱をはじめ机や壁にも住職
の心配りが行き届いている



本堂の欄間は山田耕健師によるもので、
裏側も彫ってある



内陣の天井、写真下が欄間の裏側にあ
たるが、細かい細工が施されている



品川区の指定文化財となっている本尊阿弥陀如来三尊像。
永正5(1508)年に作られた定朝様式の古仏で千葉の五井にあった寺から遷座された



十二月の園便り
平成廿三年十一月廿日
専修幼稚園

十二月八日はお釈迦様のお侍を所
れた聖日として、善修幼稚園にはこの日を
大御生日として、成道会の集を止し
才都は式典や才都では伊賀のなんぼろ
さんお歌を才都では伊賀組全員一つにな
る合同劇・金色の虎（即披露して）
お釈迦様のお情を祝います。
御衣皆様のよう。御本加下まで来て
共にお歌を教します。よろしくお饒に
押し上げます。

12月8日お歌
水戸お歌
水戸お歌

8水戸成道会
水戸成道会
水戸成道会

三月八日
三月八日
三月八日

十二月九日 德日

忍辱持久

教えを知らず

せんをきり

16
金
銀
冊

努力

۱۰۰۰

朝

人は求めた

430

1	2
3	4
5	6
7	8
9	10
11	12
13	14
15	16
17	18
19	20
21	22
23	24
25	26
27	28
29	30
31	32
33	34
35	36
37	38
39	40
41	42
43	44
45	46
47	48
49	50
51	52
53	54
55	56
57	58
59	60
61	62
63	64
65	66
67	68
69	70
71	72
73	74
75	76
77	78
79	80
81	82
83	84
85	86
87	88
89	90
91	92
93	94
95	96
97	98
99	100

5. Answered

100

元香
 月
 日

のてゝ殺して

はなう

平

聚賢堂

卷之四

い、えほ	を
------	---

2000

非

Results in

浄土

2012/1月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・五反田 専修寺	写真=タカオカ邦彦	1
祈りの詩 鎮魂の歌	佐山哲郎	6
寺院紀行 東京・五反田 専修寺	真山 剛	10
会いたい人 白井晃さん③	関 容子	18
響流十方	袖山榮輝	26
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	30
小説渡辺海旭	前田和男	38
誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	51
編集後記		52

表紙裏・ 駅をめぐる点景 村上 健

背表紙裏・ 絵巻に見る法然上人



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頼伽舎

祈りの詩 鎮魂の歌

東京根岸・西念寺住職
本誌編集部

佐山哲郎

平成二十三年は日本人にとって忘れられない年になった。三月十一日、突如、東日本を襲った大地震、そして大津波。それに伴う原発事故。流された人々、街。夥しい数の死者、行方不明者。残された瓦礫、溢れ出る避難民。

慟哭のなかで人々は我が身の無力を思い、悲哭のなかで文明はその限界を痛切に露わにした。

もつとも素早い対応を見せたのは民間の人々だった。そのなかに、いち早く支援物資を運んだ仏教者、浄土宗東京の青年僧のグループもいた。被災地で、彼らが一様に感じたことは、物資はもちろん必要だ。だがそれ以上に、ともに語るべき言葉が必要なのだという

こと。言葉が、言葉が。

朝明けて白布に顔をおほいやり今いつさいをわれは失ふ

夜のわれをかこむ死者たち声たてず本のうしろのやうな背中よ

青年僧らの、リアルタイムの熱意にあふれた報告を聞きながら、私は想念のなかに密かに沈みこむ。沈み込んだ泥濘^{でい}の底に、遙か昔に読んだ大西民子の短歌を拾っていた。「雲の地図」という歌集のなかにある二首である。姉が妹の死を歌ったものだから今度のこととは直接に関係はない。だがここには死者が自分の分身であること、あるいは自分そのものであることが歌われていた。

狂ひ花ほのかに白し人間を厭ふところを鎮めがたしも

神官の血を引いた歌人、岡野弘彦はこう歌ったことがある。公憤も私憤もその輪郭はとつくに融解し、ただ噴出するときに語る言葉として。

帰るとはつひの処刑^{しお}か谷間より湧きくる螢いくつ数へし

前登志夫ならば『子午線の繭^{まゆ}』。帰るとは即ち帰郷。この歌人の故郷は吉野だが、帰ることへの罪業において自身を責めている。郷里をただ懐かしむことなど許されぬ。人間の業の深さ、自分の業の深さへの苦しく激しい自覚。

激動の昭和を送る遠空に死霊を負ひて去らぬ鳥たち

すでに人の絶えたる街に遺されし椅子ありて虫のたぐひが棲める

生きながら吾は無縁の鬼なれば無縁の墓を年の瀬に訪ふ

植えざれば耕さざれば生まざれば見つくすのみの命もつなり

ガス室をアウシュヴィッツに作りしも人間なればあきらめ眠る

富小路禎子

馬場あき子

島田修二

生き残る必死と死にてゆく必死そのはざまにも米を磨きあつ

雨宮雅子

逆いし死の殉じたる死の中の生きたき声は聴けり わが耳

田井安曇

外套のままのひる寝にあらわれて父よりほかの霊と思えず

寺山修司

乱数表のように歌が交錯し、振じ曲がつて読み取れぬ悪意の文字となつて私を襲う。まさに激動の昭和。あの昭和の亡霊として。

被災地から、その眩きが聞こえてきたのは、東日本大震災の全容が刻々と報道され、加えて原発事故の酷さ、対応の劣悪な拙さに日本中がまさに言葉を失った頃であつた。

それは、三月十六日四時二十三分。

「放射能が降っています。静かな静かな夜です」

ときには一分おき、ときには三分おきに、眩きは発信された。同じく十六日二十三時五十三分には、「ガソリンがもう底を尽きた。水がなくなるか、食料がなくなるか、心がなくなるか。アパートは俺しかない」

ツイッターと呼ばれる、携帯電話を使った眩き。最初は五十人もいなかったフォローワーが、あつという間に百、二百と増えていった。発信者は和合亮一。中原中也賞、土井晩翠賞を受賞した詩人である。「まず地鳴りがする。そして揺れる。一瞬、何かがはしゃぐのだ。ほら、この静けさは騒がしい。しーっ、余震だ」

十八日、五百五十件のフォロー。「眠り方が分からないのです。揺り動かされるからです。どうすればいいのですか。潮鳴り。花吹雪。口笛。鳥のさえずり。雲の切れ間」

福島市のアパートの一室から彼は発信した。その部屋を彼は独房と名づけた。そこから

投げる言葉を彼は「詩の礫」と呼んだ。

「放射能が降っています。静かな静かな夜です」

この一行は何度もリフレインされ、共感と呼んだ。

四月、フォロワー一万四千人。

ときには「涙」の一字。「両親を失つてもか、家が流されてもか」と書き、次は「無言」の二字。そして五月二十六日。「詩の礫」の最終章を迎えて、彼はぼつり、ぼつりと呟きを発信した。

「共に信じる　ここに記す」

「祈りとして　この言に託す」

そして、

「明けない夜はない」と。

『詩の礫』は一冊の本にまとめられ、徳間書店から出版された。

「街を返せ、海を返せ、風を返せ、恋を返せ、誇りを返せ、福島を返せ」

本の帯にはこう書かれている。平成の詩、平成の靈歌とは、畢竟ひっきやうこのような咆哮ほうこうとならざるを得ない。昭和の数々の悲歌を超えて、ここに結晶した詩人の魂。

平成二十四年を迎えて、私たちが共に語るべき言葉を、詩人はついに最終行に置いたのだった。

明けない夜はない。

寺院紀行

東京・五反田

専修寺

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



仏教保育の専修幼稚園では毎月1日に園児が本堂でお参りするのが恒例行事

「この新しい本堂の落慶で4回目の建前になりました」

専修寺第二十七世、加藤亮哉住職のこの言葉でインタビューが始まった。

建前とは建物を作る時にその建物が無事であるようにと願いを込める儀式で、建物の基本的な骨子ができ上がり棟木をあげる時に行なう上棟式のことだ。つまり、加藤住職は4回本堂を建てたということで、その4回目の建前は専修寺開創四百五十年を迎えた平成二十年四月のことだった。

初めは戦災後に建てたバラック同然の本堂、そしてこのたびの本堂。「建物は3回建てないと満足のいく建物はできない」といわれる。4回目の建立はどうであったのだろうか。住職にそのことを尋ねると、この日が来るであろうと以前から準備していた樺を本堂の欄間に使い、お茶室の床柱も吟味に吟味を重ね……と、本堂、客殿の隅々までに心を配れた建物に仕上がったという。が、品川区の行政指導によって純木造の本堂にできなかったことが、少々心残りではあるが、本尊様をお守りする本堂が安全であることを考えれば安心ですとのことであった。

「私は子供の頃から細かい手仕事が好きで、それが高じて図面をよくひきました。何年か前にこんなものを作りました」と言ってみせてくれたのが、心という字を彫った作品だ。巻頭グラビアをご覧ください



赤坂一ツ木に専修寺があった頃の地図。ここから五反田に移転している

ただきたい。

さて、ここで専修寺の歴史をひもといてみよう。

専修寺の歴史は東京の寺院としては古く、室町時代の永禄2（一五五九）年に青山に創建された。開山は曇誉直達上人で、青山にあった勢至堂を改築し本堂として増上寺から山号と院号を賜り、一行山弘願院専修寺の歴史が始まった。

そして、その後は移転の歴史をたどることになる。戦国時代の天正19（一五九二）年に徳川家康の江戸城改築に伴い、青山から赤坂の堀端に移転、江戸時代に入り寛永2（一六二五）年に徳川家光の江戸城外堀の掘削で、同じ赤坂の一ツ木に移る。その後江戸時代に二度焼失、そして明治41（一九〇八）年には大日本帝国陸軍の近衛歩兵第三連隊の敷地拡大で五反田の中原街道沿に移り、昭和38（一九六三）年には東京オリンピックに伴う首都高速道路建設で移転して、平成20（二〇〇八）年に桐ヶ谷斎場近くへ移転して今日を迎えている。

江戸、明治、昭和、平成となんと5回も移転している。どれも幕府や軍、国の公共事業に関わる強制移転で、特に明治の移転では、移転期間を一年と定められたこともあり時の住職に大いに負担がかかり、移った2か月後に遷化されている。それを思うと平成の移転は、移転先となった専修寺の墓地整備が大変だったものの、計画的



同じく赤坂一ツ木時代の境内図。色々な伽藍があった

な移転で、5回の移転の中では十分な準備ができたという。

さて、創建当初から明治末期まで江戸城の近くに伽藍を構えていた専修寺は、徳川家の家臣の菩提所として興隆した。吉宗の時代に長崎奉行になった松波家が過去帳に残る一番古い檀家だが、その他に山内家、小島家、そして紀伊・尾張徳川家、井伊家、内藤家、青山家、水野家などの在京大名家の家臣が檀家となっている。そう、専修寺は武家の寺だった。

話を戻そう。加藤住職の最初の建前は終戦直後の専修寺の復興だった。まだ混乱の最中で、品川区旗の台のあちこちに転がっていた材木を弟の亮功さんと住職とで五反田まで焼けてゴムのないタイアのリアカーで運び、手造りしたバラックの仮本堂建築が最初となった。そして次の建前が専修幼稚園。こちらも戦後の昭和26年に開園している。

「建物を建てることを普請と言いますね。これ、普く請うということ、多くの人の力や憶いを借りることなのです。専修幼稚園はその計画を檀信徒に知らせる前に、読売新聞に『地元民期待の専修幼稚園近く誕生』という記事が出てしまった。でも、当時は後に団塊の世代と呼ばれるベビーブームで生まれた子供がたくさんいたこともあり、幼稚園開園を後押ししてくれた住職の母が会長を務めていた国防婦人会の関係者から寄付を、総代も資金援助を申し出



赤坂から五反田に移転された時の専修寺本堂。天保11(1840)年に再建された伽藍が移築された

てくれ、檀家も賛成して協力してくれました。それでも資金不足でしたが、地元の大工の棟梁が残りの金はできてからでいいと園舎を建ててくれました。当時私はまだ24歳の若僧、多くの人のお助けがあつてこそその普請でした」

こうして昭和26年4月8日、お釈迦様のお誕生の日に専修幼稚園は初めての入園式を行った。以来5千人近い園児が卒業し、品川を代表する幼稚園になっている。

さて、加藤住職が幼稚園を始めたきっかけはその両親に因るところが大きい。前夫との間に儲けた二人の子をともし病気で亡くした母の苦労や昔話を見聞きし、世の中の母を助けたいと子供心に思つたという。また芝中二年の春、昭和14年5月には父が遷化、当時離れていた墓地と本堂を一緒にすること、寺が運営する幼稚園設立が父の夢だったという。

そうした両親の想いもあり、加藤住職が専修幼稚園を開園すると、戦後の混乱期ながら約80人の園児が集まつた。教育方針はもちろん仏教保育、園児たちは月に一度は必ず本堂でお参りする。また毎月出されている『園便り』は加藤住職の奥様で専修幼稚園主事の清子さんが、発行当初から手書きで作っている。これも巻頭グラビアをご覧いただきたいが、紙面に仏教の教えの解説がある。昨年4月から12月までの教えが、合掌聞法、持戒和合、生命尊重、布施奉仕、

専修寺本堂で清子先生の話聞く幼児たち。幼稚園は、お寺から歩いて5分



自利利他、報恩感謝、同時協力、精進努力、忍辱持久。これを園児の父母にわかりやすく説明してある。

そして、加藤住職はこう語る。

「教育は人が大切です。子供の教育はその親ともどもで、どちらの教育も欠かせません。ですから入園希望者には両親の面接を行っています。子供でなく親を見るのです。うちの保育方針と合いそうかどうか。同時に園児と触れ合う先生方にも仏教精神を理解してもらう事を大切に行っています。毎年正月には職員だけの修正会を行い、一人ずつ前年の反省と新年の抱負を述べることになっています」

専修幼稚園は専修寺の運営する幼稚園として仏教の教えを伝えることを大切にして、仲の良い夫妻のチームワークでやってきたのである。

そして、その幼稚園を二代目園長として受け継いだのが長男の長谷川俊哉大巖寺副住職だ。千葉にある浄土宗の名刹大巖寺に9年前に養子に入り姓は変わったが、専修幼稚園の第二代園長を11年務め、両親が基本としていた心の育成の上に身体育成を取り入れた。園外行事を新設しそれを行事化、また舗装されていた園庭を土に戻して子供たちをはだして走らせ、冬も薄着と「心の入れものである身体も鍛える」ことを大切にした。これは総合幼児教育研究会という全国組織の会から学んだことだという。そしてその会に参加してい



応接間に面している庭園の池。四季を感じさせる趣のあるつくりになっている



専修寺墓地にある歴代住職の墓

たのが、奥様となった大巖寺の娘さんだった。ちなみに大巖寺にも大巖寺幼稚園があり、昨年園舎を建て替えたというが、専修幼稚園での経験が大いに活かされたからのようだ。続いての三代目として九年目の園長を務められているのが長女のご主人、甘利直義専修寺副住職だ。

甘利副住職は昭和27年、医師会会長も務めた品川区の開業医の息子として生まれ、小学校から大学まで慶應義塾。希望通り小学校の先生になる。慶應義塾、桐蔭学園、清泉と24年間教壇に立ったが、人間としての幅を広げるための充電期間を一年間持とうと48歳で退職。何をしようか思案中に、奥様がお寺出身なので、ちよつと寺で気分転換でもするかという軽い気持ちで専修寺を訪れたという。

すると加藤住職がどうせならと浄土宗僧侶の養成講座に入れてしまった。それまで修行とか仏教とは無縁の甘利副住職、なんとか7日間頑張ったが根を上げる。義父である住職に京都の修行道場から電話、もう辛いのでここを出ますと言うと、わかった、でも、今まで子供たちになんばれがなんばれと言ってきたのだから、あと3日はがんばれと言われ、それもそうだと思ひ直して10日目までがんばった。すると不思議なことに気持ち急が落ちて、仏教の教えが自然と身に入ってくるようになったという。甘利副住職の言葉を借りると「仏教の教えが腑に落ちた」のだ。

東急目黒線の不動前駅が最寄り駅で、徒歩7分



結局、四週間の修行を無事に終え、翌年、翌々年と修行を続け、僧侶の資格を取った。こうして専修寺と専修幼稚園は思わぬ後継者を得ることになる。

普く請ける、多くの人の縁があつて建物を建てることができるように、専修寺はその移築の歴史の中で幼稚園を寺の柱として家族や有縁の方々の総力で続けてきた。これは「仏教保育とは仏教教化である」という言葉を期せずして加藤住職、長谷川大巖寺副住職が話されたことからわかる。そしてまた、寺の以外の世界から飛び込んできた三代目園長の甘利副住職は今それを一番肌で感じ実践されている。小学校教諭として最後に教えていた学校がキリスト教の学校で、キリスト教にはなんとなく馴染めなかったものの、宗教教育には興味があつたからこそ、無意識ながらもお寺に縁を求めたのが、まさに自然の道理だったのだろう。

お寺と幼稚園、二足のわらじは大変で、甘利副住職はそれまでの園長がそうだったように一日の大半の時間を幼稚園で過ごしている。そしてまた、専修寺で生まれ育った奥様の良子さんも一教諭として専修幼稚園の園児たちに愛情を注いでいる。三代目園長夫妻が、そして仏様が見守る中、子供たちはいつの時代もそうであつたように専修幼稚園で仲良く歓声をあげている。

(ルポライター)



笑顔が素敵な専修寺加藤亮哉住職は平成20年に雙光旭日章を授章されている

連載

会いたい人 関 容子



撮影/タカオカ邦彦

白井さんは現在最も売れている演出家の人だろう。ここ何か月かの仕事ぶりを見ても、11年は十一月の『天守物語』（泉鏡花作）、十二月のミュージカル『GOLD〜カミ〜ユとロダン〜』（白井晃上演台本）、12年早々には『魔笛』（モーツァルト作曲）、『幻蝶』（古沢良太作）の演出が控えている。

演出家の仕事は指揮者に通じるところがあると思うけれど、どうだろうか。

「そうですね。まず脚本があつて、作家の言いたいことをしっかりと読み取らなくてはならない。それを役者の肉体を通して起こる感情の化学変化みたいなものを出させなきゃいけない。誤読や拡大解釈になる可能性があつても、それはそれでいいと思う。今、『天守物語』に取り組んでますが、これは白鷺城の天守に棲む美しい妖怪の富姫と、若い人間の男、図書之助との恋物語ですよ。最後に桃六という彫刻師の老人が出てきて、危機に陥った二人を救うんだけど、幕切れで桃六が笑うで

しょう。その桃六の視線に僕の解釈した視線を持たせてみたいな、というのが眼目の演出です。図書之助は鷹匠で、鷹という自然をあやつってるのは自分と思つてるけど、それは人間が勝手に作つた論理で、自然は誰にも支配されるものではない、と富姫が堂々と云いますね。このひとりで、図書之助は目からウロコで、自分の価値観が変わる。そこが鏡花の最大の視線だろうと思うんです。大正六年、日露戦争に勝利して浮かれ始めている時代に、天守から見おろして槍や鉄砲を持って騒いでる下界の人間どもを、バカな奴らめ、と笑う。なんともすごい視線だと思ふんですよね」

その昔、私は『天守物語』を若き日の六代目歌右衛門の自主公演（蒼会）で観たが、桃六は名優猿翁（三代目猿之助の祖父）だった。鑿と木槌を手にした裁付袴に頭巾姿で、まるで『修禪寺物語』の面作り師夜叉王のように立派で、芸術家と俗人との対比が鮮やかだった。短い出番なのに歌右衛門が猿翁にこの役



「遊●機械／全自動シアター」時代の白井さん

を依頼したというのは、いかに幕切れが重要かを理解していたからだろう。その演出家的見識がうかがえる。因みに図書之助は十四代目勘弥（玉三郎の養父）。

「キャストイングというのは演出の上で非常に重要です。玉三郎・海老蔵のコンビがあまりに定着しているので、富姫は最初は女優でお願いしようかと思っただんですが、妖怪の姫をやるのに、女性で、その力強さを出せる人はなかなかいないので、自分と同世代で、小劇場でも活躍してきた篠井英介さんをお願いしました。自分のやりたい方向性をしっかりと共有できると思ったからです。図書之助役はあまり舞台経験のない平岡祐太君で、敢えて、その新鮮さを図書之助に求めました。今日の稽古でもそうでしたが、役へのアプローチに苦勞している時は、自分自身でもやってみせて、例えばこういうやり方もあると思う、と提示しますが、平岡君が僕の真似をしたところでそれが正解ではない。形を乗り越えて自

分のものにしてこそ本物になる。自分が結果的には楽しんで、君の図書之助を演じればいい……というような演出ですかね」

後日、その『天守物語』を観た。見慣れた歌舞伎座の横長の舞台が新国立中劇場の奥行の深い縦長に変わって、富姫や亀姫が天界から降り立つところや、下界の戦闘場面の状況が明確に視覚化され、随所に白井さんの美意識が観て取れる新鮮な舞台だった。

アフタートークで篠井さんが、相手役に惚れこんでついて行く幸せを「女形の性さが」と語り、ちよつと感動的だった。

白井さんの演出の現場が、役者を厳しく扱う一時代前の演出とは、だいぶ違うらしいことに好感を持った。

「稽古場の中で人間的に追いこむというのはいやですね。もう苛めに近い。僕はやりたくないです。演出家という立場だけで、なぜ人をそんなに否定することができるのか、と思

う。早稲田に入って間もないころ、寺山修司さんの『天井桟敷』の芝居のエキストラに出さしてもらったことがあるんです。紀伊国屋ホールに行つて、東北弁で、だからそんじやない、こうだつてば（笑）、つて、あの声をナマで聞けたことにゾクゾクして興奮しました。劇団の中では、圧倒的な存在感で、寺山さんの価値感と美意識で全てが動いていました。『早稲小』の鈴木忠志さんの演出というのは、劇研時代に眼のあたりに見させてもらつて、その強靱な精神力と確立した方法論は尊敬していましたが、自分にはこうはできない、と思つて見てました。稽古は本当に厳しくて、人間としての在り様まで言及される勢いでした。鈴木さんには誰も口答えできませんからね。そういうカリスマ性のあつた人で、すごいと思ひながらも、座長が君臨して集団を引っばつていくという形に、何か違和感を感じていました」

この間、テレビで杉村春子の黒沢明監督に

よる『赤ひげ』のリハーサル風景を見た。長屋の女たちから大根で頭を強くぶたれて、その大根が二つに折れて飛び散るところを何回も何回もやらされ、みるみる大根の山が減つていくのを、呆氣にとられて見た。

「僕らの世代は、灰皿投げとかへの反作用で、もうちょつと民主的にやろう派です（笑）。でも場合によつては、この役者のこのアリサマを許すの？ という、周りに対するアナウンスも必要だね。僕は認めてない、怒つてる、ということでもみんなの信頼感を得ることもありますから。そうじゃない、もう一回、もう一回つて、しつこくはやりませうけど。たまに怒るときは怖いらしいです（笑）。でも、役者一人一人の持ち味を僕は引き出していききたいんで、僕の枠組みにみんなを引きこんでいきたいとは思わないんです。僕もエレメント、みんなもエレメント。その中で化学反応を起こして一緒に作ろう。演出家だから先頭には立つけれども、みんな力を合せてやろう、つ

て、そういう感じですね。でもときどき出てくる言葉が、もつと腰下げて、こうやって声出すんだよ、って。あれ？ 結構強引にやってるって思うことがあります（笑）」

白井晃夫人は女優の秋山菜津子さん。

‘01年、内野聖陽と秋山の二人芝居『ブルーム』（デビッド・ヘアー作、デビッド・ルヴォー演出）をベニサンピットのマチネーで観た。私のすぐ後ろの席に勘三郎（当時勘九郎）さんが一人で座っていて、え？ なぜなの？ 夜には歌舞伎座で『鏡獅子』なの？ 間に合う？ という顔で振り返ると、「好きな女優さんの芝居だから。時間は大丈夫」とにっこりした。

『ブルーム』は二十世紀初頭、ウィーンで発表されたシュニツラーの『輪舞』を元に、時代を現代に移して男女二人による愛のシーンが十場つなぎで構成されている。かなり際どい場面が多かったが、そこに至る二人

の心の動きが面白く、何よりも勘三郎さんが注目するだけあって、柔軟な表現力のある素敵な女優、という印象だった。

『ブルーフ』という芝居で寺島しのぶさんの姉さんの役をやるのを見て、こんなタイプの芝居もやれるんだ、と興味を持って、当時のうちの劇団（遊●機械／全自動シアター）にゲストとして出てもらったんです。小劇場系の芝居にもたくさん出ていましたが、高校時代、リアリズムの新劇スタイルを勉強してきた人で、せりふ一つ一つに真摯に向き合う姿勢というのに僕は魅かれたんですね。『ブルーム』を見て特にそう思っただけで、秋山のやる芝居の世界が僕の中に入りこんだらどうなんだろう、と夢想し始めた。私生活というのは、自分の表現に反映していきますよね。そういう人と一緒にいるか、それが大きく考え方などに関係してきますからね」

秋山菜津子は、00年、大人計画の松尾スズキ演出『キレイ』で注目され、『ブルーム』

白井さん演出の「ムーン・パレス」(陰山泰さん、遠藤雅さん 撮影/野住智恵子)



では杉村春子賞のほかに二つも賞を受けた。以来、野田秀樹、いのうえひでのり、岩松了などの芝居で活躍しているが、'03年には『ニンゲン御破算』（松尾スズキ作・演出）で勘三郎と共演。その許嫁役を演じている。

「不思議な縁で、秋山は勘三郎さんが気に入って下さっていて、私は私で、演出家の串田

和美さんと一緒に何本か仕事をしていました。私は勘三郎さんと串田さんコンビのコーン歌舞伎の大ファンで、串田さんに稽古を見せていただいたことがあったんです。勘三郎さんにご挨拶した時、秋山の話になって、そしたら、えっ？ えっっ!! そういうことなの、って（笑）

’09年六月、コクーンで南北の『桜姫』の南米版（長塚圭史脚本、串田和美演出）として、勘三郎、白井晃、秋山菜津子は共演する。

白井さんは清玄阿闍梨に当るセルゲイ、勘三郎は釣鐘の権助ならぬゴンザレス、大竹しのぶがマリア（桜姫）、秋山菜津子は色っぱいお局長浦に当るイヴァで、その相手の悪人坊主残月（ココージオ）に当るのが古田新太（あらた）という多彩な顔ぶれだった。

「僕は秋山に首絞められる役でしょ。白井さんを殺せる、って面白がってやってました。入籍はしていましたが、ちゃんと披露しなかったんです。恥ずかしいからいやだという

のに、勘三郎さんが、ダメ、やんなきゃダメ、って言って、披露パーティーの発起人を買って出してくれました」

白井さんはその風貌にいかにもふさわしいキリツと冷えた白ワインが好み。

この日も『天守物語』の稽古場を抜けてきて口にした一杯が効いて、少し話し過ぎたかなと照れながら、こうつけ加えた。

「僕はどうやら、その人の才能に惚れこんじやうとところがあつて……ちよつとダメなんですよね（笑）」

（この項おわり）

『幻蝶』3月12日～4月4日 日比谷シアタークリエ
出演・内野聖陽、田中圭 演出・白井晃

癡言そごんと自害と害彼と彼此俱害とを遠離し、善語と自利と利人と人我兼利とを修習す。

『無量寿經』卷上

〔法蔵菩薩は〕荒々しい言葉遣いや、自分を傷ついたり他人を傷つける振る舞い、自分も他人もともに傷つける振る舞いから遠ざかり、優しい言葉遣いや、自分を大切にしたり他人を大切にする振る舞い、自分も他人もともに大切にする振る舞いを身につけ実践したのである。

（浄土宗総合研究所編『現代語訳 浄土三部經』（浄土宗）より）

忍土なればいそ

柔道には、「参った」がある。プロレスにも、「ギブアップ」がある。もちろん負けを承知の上で、もうこれ以上は無理と白旗を上げれば、我慢できない痛み、危険だと思える痛みから逃れることができる。でも、病気による痛みはそうはいかない。「参った」を言っても、「ギブアップ」をしても、その痛みは聞く耳を持ってくれない。勘弁してくれない。気がすむまで技をかけ続け、いたぶるだけ、いたぶってくれる。反則を厭わない悪役レスラー、それが病気の痛みだのようだ。

年男だった昨年、生まれて初めて入院した。四月、小生が腹痛で十日間ほど寝込んだことは本誌六月号ですでに記したが、これには後日談がある。それから三ヶ月後の七月、再び腹痛に襲われ、今度は入院してしまったのだ。

腹痛は、どうやら夜起こるものらしい。まるで四月の再現のように、再び腹が痛くなった。我慢の範囲を超えている。夜間の救急病院に駆け込んだ。ところが、検査をしてもデータに異常が見つからない。四月の時もそうだったが、こっちは一刻も早くこの痛みを取り去ってもらいたいのに、緊急医は「様子を見ては」の雰囲気。こんなに痛いのに、いったいオレの身体はいったいどうなってるんだと思った頃、消化器外科が専門の先生が見えられ、「もう少し、調

べさせて」と血管造影剤を入れてCTを撮った。痛みの原因が分かった時には夜が明けていた。診断は虫垂炎と大腸にできた憩室炎。即入院。抗生剤で炎症を抑えることになった。

入院となれば、請け負っていた仕事を全部断らなければならない。申し訳なかったが、痛みの原因も分かり、これできつと痛みを取る処置があつて、すぐにでも楽になると思った。でも、そう甘くはなかった。痛み止めの点滴をしたところで、すぐに効くわけじゃない。身動きの取れない激痛が和らぐまでには、なお数日を要したのであった。

ところで、この世のことを娑婆という。梵語でいうところの「サハー」を漢字に当てたが、漢訳では「忍土」。この世は耐え忍ぶことだらけということである。耐え忍ぶにしたって、身体の痛み、あるいは心の痛みには、我慢できる範囲のものと我慢できないものがある。我慢できないから、その痛みに「参った」、「ギブアップ」をするのだけれども、その痛みは一向に容赦がない。我慢できなくとも、それを忍ぶしかない。じつは、それが忍土、娑婆の本質なのである。

幸せに見える人もそうでない人も、誰も彼も、私もあなたも、どうしようも

なく辛い目に遇う時がある。否応なくさらされる痛みに、精根尽き果て、我慢の限界を超える時がある。でも、そんな忍土だからこそ、お互いがお互いを思いやり、支え合うしかないんじゃないだろうか。

『無量寿経』によれば、阿弥陀さまは法蔵と称せられた菩薩の時代、言葉遣いや身の振る舞いに注意しながら修行に励んだという。人は誰かの何気ない一言、行動に傷つき、思いのこもった一言、行動に救われることがある。忍土の切なさを知ればこそ、そう心がけてこられたのであろう。

昨年は、腹痛を通じて忍土のありようをこの身体に刻み込んだ。法蔵菩薩のようにといつては恐れ多いが、今年は、優しい言葉使いと穏やかな微笑みを絶やさぬよう挑戦してみようかと思う。みなさんも、どうだろう。

なお、筆者も現代語訳に携わった『現代語訳 浄土三部経』は浄土宗における法然上人八百年御遠忌の記念出版。全国の書店でご注文いただける。ご案内まで。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

「法然上人をめぐる人々」

師を慕う 親鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



連載

第七回

——先の摂政関白兼実を——

十九

先の摂政関白兼実を小一時間も待たせたあげく後鳥羽はやっと兼実の前に姿を現した。灯火の火影、上皇の不愉快極まりない顔が浮かび上がっていた。

後鳥羽が水無瀬離宮から仙洞御所に戻って二日目の夜であった。

普段なら

「よう来た。何か事件でも起きたか」

などと先ず声を掛ける後鳥羽であるが、今夜は兼実を睨み据えて何も声を掛けない。

「院！」

兼実は平伏して言った。側近の公家たちが仙洞御所にあつまり、親鸞を処刑すべしと言いつつ立てたことは、すぐに兼実の耳に入っていた。後鳥羽太鼓もちの一人が、御所を下がるや、今度は兼実の邸に駆けつけ、誇張を交えて一部始終を話したからである。

「先般からの専修念仏をめぐる騒動、わたくしもいたく心を痛めております」

兼実は言った。

「ふむ」

嘲笑した後鳥羽の顔が火影に揺らめいている。

「如何にもそうであろう。寛大な措置を願う使者をそなたは水無瀬にまで遣わしたからな」

「恐れ入ります」

兼実は頭を下げた。

「そなたが法然房に帰依しておることは余の耳にも入っておるわ。しかし、今回の騒動で余が下す処分に口を挟むことは許さぬ。よう心しておけ」

口をきいている内に後鳥羽の怒りは破裂した。

「余の耳には南都や叡山からだけではなく、さまざま所から事の次第が入っておることを忘れるな」

後鳥羽は荒い息づかいで、喚くようにいった。

「もしそなたの先祖の功績を思はなんだら、今回の件では九条家の所領は召し上げた上、兼実！そなたのことは遠流にするところなのだ」

「……」

後鳥羽の怒りに兼実はただ平伏して聞き入るばかりである。

「そなた、親鸞とやらの娘を嫁がせたそうだな」

相変わらず荒い息づかいで上皇はいった。怒り狂う後鳥羽の気持ちの、これが中心であった。

「院にも朝廷にも諮らず、仏前で勝手に婚礼を挙げたとは、仏と朝廷に対するこれ以上の侮辱はない。反逆罪である。死罪にあたいしようぞ」

二十

「何ゆえだ何ゆえだッ。何ゆえかかることをしたッ」

権力者が何にも増して嫌うことは、臣下から無視されることである。兼実が後鳥羽自身と朝廷を無視して、彼らの知らぬ間に僧侶に娘を嫁がせていた怒りで、後鳥羽の心はいっぱいであつた。

「答えよ。なぜ黙っておる。答えぬのも反逆罪であろうぞ」

黙ってただ平伏している兼実を見据えて後鳥羽はいった。

後鳥羽の怒りに対し、落ち着きを取り戻して兼実は答えた。

「――院と朝廷に諮ることなく、仏前で婚礼の式を挙げて娘を僧親鸞に嫁がせましたこと、院と朝廷に対し奉り、まことに畏れ多いこと、でございます。しかしわたくしは今回のこと、

仏の道には背いておらぬと信じるのでございます」

後鳥羽はかッとした。思わず一段下の床に控えている兼実のところにつかつかと降りたと思うや、彼の足を足蹴にした。

一瞬の出来事であった。

「そなた、余に説教をする気か。ふざけるのもいい加減にせよ」

上皇が座す上段の間に戻ると、呼吸を整えながら後鳥羽はいった。

「そなたの言い分はみ仏をも愚弄しておる」

「……院」兼実は顔を上げると後鳥羽に呼びかけた。

「院のお怒りは尤ものことでございます。しかしまことに畏れながら上申したきことがございます」

「おお、言い分があるとな」

後鳥羽は怒りと忌まわしさに顔を歪めた。

「【盗人にも一分の理】というのはそなたのことであつたわ」

読者よ、筆者がこう記す後鳥羽の言動を、ありえないことだ、などとは思わないで欲しい。先には後鳥羽も、公家たちとの会話でいつていたように、当時、僧侶は独身を建前とし、僧侶の公の結婚など前代未聞のことであり、朝廷は許していなかったのだ。

そうかと言って、実際には多くの僧侶は、「側室」を持つていて子どももいたが、僧籍に入った親王でさえ公の結婚は許されず、建前はあくまで独身であつた。

僧侶たちは、いわば二重生活をしていたのである。

このような時代であつたから、僧侶が仏前で婚礼の式を挙げて公に結婚するなど有りえないことであつた。【死罪にも相当しよう仏道と朝廷に対する反逆】であつた。

「わたくしは文治の世から叡山や南都、真言の高僧に学ぶとともに法然房にも聴聞してまいりました」

兼実はいった。



「それがどうしたというのだ。朝廷に仕える公卿であれば、だれでもその位の勉学には精進しておるわ」

「院」兼実は、両手を床に着いたまま顔を上げて後鳥羽に呼びかけた。

「寛大な院のみ心を頼みとして言上する次第でございますが、わたくしは仏の道はあまりに奥深く、凡夫の身では到底往生はかなわぬことに気付いたのでございます」

「藤原家の棟梁のそなたが凡夫とはな」

後鳥羽はあざ笑った。「しかし娘を出家させるでもなく、堂々と親鸞とやらに嫁がせたところを見ると、仏の道に進みえぬ凡夫も凡夫。たしかにそなた、物事の理非を弁えぬ俗人であったの」

二十一

「確かにわたくしは凡夫に過ぎませぬ。叡山や南都の教えの深遠さを聴聞するにつけ、こ

れはとてもわたくしごとき者が辿れる道ではないと気付いたのでございます」

「たしかに、そなた如き男に聖徳太子、伝教大師以来の仏の道は分るまい。しかし、分かつと精進するところに仏の道の尊さも、人の道もあるのではないか」

そう一氣にいうと後鳥羽は一息ついて、
「藤原家の氏長者を務めたそなたが、かかることさえわからず、叡山・南都の教を貶して法然房一人に帰依したとはまことに嘆かわしいことだ」

「南都北嶺の教を貶したのではございませぬ。ただ、年を追うごとにわたくしは己が凡夫であることを知るようになってまいりました。そのような時に、法然房の卓越した人格に深く惹かれはじめたのでございます」

「ふん。娘を公に親鸞に嫁つがせたというのも、日陰の身に娘をしづなかつたからであらうが、まことにそなたは凡夫よの。なれど、僧の結婚は御仏も朝廷も許してはおらぬこと

を、知らなかったとはいわせぬぞ」

「もとより存じておりました。娘を日陰の身にさせたくなかったのも事実でございます。ただ、わたくしは法然房の教えに依拠して、婚礼の式を仏前で挙げさせ娘を親鸞の許に嫁がせました」

「こやつ。ふざけたことをいうな。余を愚弄する気か」

後鳥羽は声を震わせた。怒りを爆発させる後鳥羽の気魄に気圧されたのか、ジジッと音を立てて灯火が揺れた。

「法然房もわたくしも、決して叡山や南都を愚弄などしておりませぬ」

兼実は答えた。

「院もご承知のように、法然房は三十年近くも叡山で精進修行した高德の僧にございます。しかし多くの民は凡夫にございます。叡山にいた法然房はかかる民も極楽往生できる道は無いのかと二十五年の余も万民救済の道を捜し求めましたとか」

「止めぬか。説教はいらぬ」

苛立たしく上皇はいった。

「余が訊ねておるのは、娘可愛さゆえにとはいえ、なぜ、仏道と朝廷の許可なく公に娘を僧と結婚させたかだ。僧となった親王さえ建前は孤独の身であるものを」

「そのことでございます」

兼実はいった。

「畏れながら言上いたします。わたくしは兼ねて實際は妻子がありながら建前は孤独の身である僧侶というものに疑問を持ってまいりました。仏の教えにも【表と裏の違いなく真実に生きよ】とあります」

「そのようなことは余も知っておるわ。しかしな、兼実」

後鳥羽はいった。

「建前と本音が違うことが世の中には数多くある。それを気付かぬようにして生きるのがこの世というものののだ。み仏とてかかることは存じておられようぞ。本音をむき出して

生きることが表裏無き生き方ならば、この世はむしろ地獄じゃ。」

「……」

「時と場合によって、人は嫌いな奴に対しては親し気に振舞うものだ。結婚を禁じられておる出家者として、性欲が収まらぬと心の赴くままに女を犯して廻ったら、この世はどうなる！地獄ではないか。出家者も女無しには生きたらぬ本音を裏に隠して、独身者であるという表の道を世にしめしているのだ。表裏を

区別してこそこの世は治まるのだ」

後鳥羽は息巻いた。

「仰せのごとく、まことにわれらはみな凡夫でございます」

静かな声で兼実は言った。

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門 古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180245231

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十八回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

奇想天外!

将校なりすまし事件



偽大尉、四千マルクを騙り取る

隣家にすむ中尉の従卒殴打事件、自由思想団の齒科医師夫人から聞かされた軍上層部の醜聞は、渡辺海旭にとってどちらも衝撃的ではあったが、それだけだったら、海旭の内奥のどこかに一部知識階級の「偏向的世論」という懷疑を抱いたままだったかもしれない。

海旭に軍の腐敗・墮落、そして權威の失墜を決定的に印象付けたのは、この年、明治三十九年（一九〇六年）の秋、ベルリン郊外の小都市、ケベニツクの軍駐屯地で起きた、世にも奇天烈な事件だった。事の顛末はこんなぐあいであった。

折りしも帰隊した十四名からなる砲兵小隊が、襟章からそれと知れる高級將校に呼び止められて、こう命じられた。

「私は帝国陸軍大尉、フォン・アロエザムである。これよりケベニツク市の不正經理の強制搜索を行なう。ケベニツク市役所へ随行するように」

市庁舎につくと、大尉は市長を拘束、会計係に金庫を改めさせ四千マルクを証拠品として押収すると、小隊を二隊にわけて、それぞれに命令をくだした。

「一隊は馬車を徵発し、拘束した市長をベルリンのモルトケ將軍のもとへ連行せよ。残りの兵はこの場に留まって守備をせよ」

そう言い置くと、大尉本人は行く先も告げずに駅舎に姿を消した。

それから数時間後、市長を護送してベルリンについた部隊から任務の申告をうけたモルトケ將軍配下の当番將校は、狐につままれた。なんの連絡も指示もうけていなかったからだ。大いに怪しんで、四千マルクの押収書類にあるフォン・アロエザムの署名をたよりに確認をしたところ、そんな名前の大尉はおらず、また不正經理も事実無根であり、これになりすましの詐欺事件であることが判明したのである。

軍と警察の威信をかけた搜索で、偽大尉は十日ほどであっけなく逮捕されるが、偽大尉

の犯行目的が判明するや、当事者の軍は面目を丸つぶれにされ、ドイツ中が騒然となった。

フォン・アロエザムをかたった偽大尉の本名はヴィルヘルム・フォイクト、五十七歳。靴職人の親から仕込まれた技がありながら十四歳のとき盗みでつかまって以来、悪状おさまらず、泥棒や贋金づくりであわせて二十五年の刑をくらって獄から出てきたばかりだった。仕事のあてもなく、当人は、一生日陰者とあきらめていたところ、身をよせた姉の紹介とある後家から求婚をされた。おそらくフォイクトにとっては、人生ではじめての天にも昇る僥倖であつたに違いない。

しかし、やがて男の有頂天は奈落へと転落する。首尾よく結婚がきまり、新居を構えるためには、旅券が必要だったが、役所で申請してもたらいまわしにされた挙句、いつまでたっても発給してもらえない。その間に結婚の日が近づいてくる。万事休した男は、一計を案じて、くだんの大博打に打って出たのである。ケベニツク市役所から騙りつつ四千

マルクは、闇で旅券をつくってもらうための代価であつた。

まさに事実は小説よりも奇なり。この前代未聞の椿事は、権威の中の権威である軍を虚飯にしたことで、庶民の溜まりにたまつた鬱憤の恰好のはけ口となった。風刺芝居に仕立てられて各地で上演されるや、いずこも大入り満員の盛況。戯画や玩具にまでされ、ベルリンはもとより、海旭の住む古都でも売れに売れ、いまやドイツ庶民でヴィルヘルム・フォイクト偽大尉の名を知らぬものはないほどの人気者となった。

さらに庶民の喝采はドイツ一国を超えて近隣諸国にまで波及。イギリス、フランスでも関心を大いに呼び、モアポートの未決監獄にあつた偽大尉のもとには毎日ように差し入れが届いた。美酒珍味にまじって、スイスからは女子学生の手作りの菓子、フランスの貴婦人からは手ずから縫い上げた服が送られ、義援金(?)も六百万マルクをこえるなど、狂騒はおさまるところか日を追って大きくなる

ばかりであった。

「皇帝の偽大尉恩赦」と ドイツ国民精神の危機

この事件は新聞でも連日報道されたので、世俗から距離をおく海旭にも届いていた。最初のうちは、庶民たちの噂話にかこつた国をあげての狂騒ぶりに食傷を覚えて「我が関心事」から遠ざけていたが、やがてインテリたちが危惧する軍の腐敗を庶民はどうみているかが理解でき、そこに危ないものを感じるようになった。

海旭がその確信を深めたのは事件が起きて二年ほどたったある夜のことだった。社会民主黨員とカトリック刷新派、それぞれ立場を異にする友人二人と、この問題について夜なべ談義をする機会があった。ビールのジョッキをかたむけながら、海旭は、この事件についてかねてから抱いていた疑念を口にして、議論の口火を切った。

「ドイツ国民はただ面白がっているようにし

か思えん。初老の靴職人を英雄に仕立てて、軍をこきおろし、それで溜飲を下げる、これは大いに危ういぞ」

「たしかに彼奴を主人公にした戯作が、わが国民作家のハウプトマンより受けているのは、危うい。世界にはこるわがドイツの文芸の危機だ」とカトリック刷新派が反応した。

ハウプトマンとは当時ドイツでもっとも知られた劇作家で、貧しい織物職人を取りあげた「織匠」は海旭も読んで大いに共感を覚えたものだが、男の反応は、文弱趣味のせいがいささかの外れだった。

「いやいや」と海旭は首をふって返した。

「今般のケペニツクの偽大尉事件はひとりドイツ文芸の危機にとどまらぬ、もっともっと大きな危機だ、ドイツの国民精神の危機だ」

「ほう、国民精神だと？ 遠国（とつくに）の坊さんにわが国民の精神をいわれるとは恐れ入った。さて、この事件のどこがどうわが国民精神の危機だというのだ」

そう社会民主黨員が興味深そうにただすの

に、海旭はビールをぐいと飲み干して答えた。「それを象徴する事例をあげよう。それは諸君らのドイツ帝国に君臨する皇帝陛下のふるまいだ」

「ヴィルヘルム二世が偽大尉を恩赦したことについているのか。そのどこがドイツ国民精神の危機なのだ」と社民党員は怪訝な顔をした。

つい最近、皇帝ヴィルヘルム二世は、四年の刑を宣告されて服役中の偽大尉を二年足らずで恩赦にして話題を呼んだが、その理由の弁がまたふるっていた。「これが規律というものだ。何人もこの点でわが国の真似ができる者はおるまい！ これこそが制服の力だ」。「粹を解するなんとも洒落な皇帝ではないか、庶民の気持ちがよくわかっていると評判だぞ」とカトリック刷新派が社民党を援護した。「なにをいうか」と海旭は二杯目を干したビールのジョッキを傍らに置くと、目をいからせた。「いささかうがった見方とのそしりをあえて承知でいうと、これは事の本質から国

民の目をそらす高等なる術策のように、私は思えてならんのだ。賢明なるドイツ国民がそれを知らぬというのが、なんとも情けない。いや庶民はともかく、賢明なる諸君がそれを見抜けぬとは……」

「なんと……」と社民党は言いよどんでカトリック刷新派の顔を見た。「ではワタナベ、ドイツ皇帝は何から国民の目を外そうとしているというのだ。事の本質は奈辺にあるというのか」

「それは貧困問題だ。その解決から国民の目を外らそうとしているのだ」と海旭は答えると、二人が目を見合わせるのを見届けてから続けた。「この間も仏典研究のかたわらベルリンに行ってきたが、貧民の窮状はそれはひどいものだ。殺生を退ける仏教徒としては、言葉にだすのも憚られるが、中に犬肉をくらってタンパク不足をしのぐものさえている」

「それはほんとうか」とカトリック刷新派が眉根を寄せた。

「ほんとうだとも」と海旭は答えた。「貧民

には牛や豚は高値の花。いまや馬の肉も手がとどかぬ。そこで路傍の犬の肉を食らう者が後をたたぬ」

「わがドイツでは、犬の肉は三十年ほど前に禁止になったはずだが」とカトリック刷新派がいぶかった。

「いやいや、ベルリンの友人に聞いたところでは、それは流通と販売の禁止であつて、勝手に食ふことは禁止されていないそうだ」という海旭に、社民党員が援軍にまわった。

「たしかに、個人が勝手に食ふことは禁じていない。つまり犬の肉は救荒食として容認しているということのようだ。これはフランスの友人に聞いたことだが、普仏戦争で、わがプロシアがパリを包囲したとき、兵糧を断たれたパリ市民の中には犬を食わざるを得なかったらしい。ワタナベがいとおりで、これぞ国の貧困施策の貧困の証明かもしれぬ」

「そういえば、スイスでは救荒食どころか、犬肉料理を掲げるレストランまであるそうだ。なんともなげかわしいことだ」とカトリ

ック刷新派も議論に加わった。

議論が食文化論へ外れそうになったので、海旭は二人を制して言った。

「そこで問題なのは、貧民には犬肉をくわせておいて、軍部はどんどん艦船をつくり兵隊を増やすのには惜しげもなく金をつぎこむ。ここにこそ問題の本質があるのではないかな、諸君」

カトリック刷新派と社民党員はまたまた顔を見合わせたが、かまわず海旭は話を続けた。「わが日本は、万事をドイツに学んでいるところだが、ドイツ人の諸君には申し訳ないが、こと軍のありかたについてはそうはいかぬ。先刻、わが故国の同胞にそのむねをこうして書状にしたためたところだ」

と海旭はいつて、「新仏教」主筆の高島米峰にあてた万年筆の滲みが残る便箋を見せた。そこにはこう書かれていた。

「肉貴くして金の如し。民馬肉を喫して飽かず。次いで犬肉を以てす。而して轅轅（もうどう）新になりて、日々幾万マルクの石炭を

食らい、兵丁いよいよ多くして、紅緑の服装
独り寂漠の寒村の美を擅にす。而も、彼等軍
隊は渺（びょう）たる一小蛮族すら未だ征す
ること克わず。士官は腐敗し、士気は頹廢し、
賭博・賄賂・背徳・士卒の虐待、日に日に新
聞に上り来る」

「おぬしの国では縦に文字を書くのか」と物
珍しげに覗き込む二人に、海旭が意味を説明
すると、二人から異口同音の反応が返ってき
た。

「これは手厳しい。わがドイツには学ぶべき
ものはないというのか」

「いやいや」と海旭は受けた。「サーベル主
義、軍隊万能主義はいただけないが、それ以
外は大いに学ぶものがある。だから、最後は
こう締めくくった」

海旭は以下の結語を示して、大意を説明し
た。

「独逸ビール酔うべし。独逸音楽酔うべし。
その学芸また或は酔うべし。而も断じてその
陸軍万能主義、海軍万能主義に酔う勿れ。兵

器を祭りて、餓えんことを強ゆ。嗚呼殆哉」
ここから三人の談論は、海旭が「酔うべし」
と提起した「音楽」と「学芸」に転じ、それ
はビールの盃を重ねながら、深更までつづい
たのだった。

海旭の危惧は、このときから十年足らず後、
英仏を相手にドイツが戦端を開いて一敗地に
まみれドイツ国民を塗炭の苦しみに陥れたこ
とで証明される。いっぽう日本はというと、
海旭の不在の間に、着々とドイツ軍部のサー
ベル主義の後を追いつづけ、海旭の希いを裏
切ることになる。

（なお、偽大尉フォイクトは出所後、自伝出
版で大金を手に入れ、ルクセンブルグに家を
買って暮らしたが、第一次大戦後のインフレ
で財産を失い、元の極貧のなかで死んだ。）

（つづく）

謹賀新年

平成二十四年

浄土門主
総本山 知恩院 門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

服部法丸

〒606-8225
京都市左京区田中門前町一〇三

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

宮林昭彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七(二二)〇六〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

浄土宗宗務総長

豊岡 瞭尔

法然上人御誕生地

美作 誕生寺

〒709-3802 岡山県久米郡南町里方八〇八
TEL 〇八六七(二八)二一〇二
FAX 〇八六七(二八)二一六二

(学)大乘淑徳学園理事長
淑徳大学学長

長谷川匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園

理事長
校長 麻生諦善

学校法人佛教教育学園
学校法人東海学園

理事長 水谷幸正

謹 賀 新 年
平 成 二 十 四 年

本應寺 隱老

熊谷靖彦

〒849-1411 熊野市塩田町馬場下甲六六一、一

大鹿山弘経寺住職

金田進徳

〒302-0023 茨城県取手市白山二、九、二八

十八種林霊場会
吞龍上人祈願所

蓮馨寺

住職 糸原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七、一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六

養運寺

田中光成

〒194-0032 町田市本町田三六五四

赤坂六地藏尊

浄土寺

〒107-0062 東京都港区赤坂四、三、五
電話〇三(三三八三)三六三〇

明福寺

福井豊信

〒132-0013 江戸川区江戸川三、八、一

鶏頭山安楽寺

飯田實雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九、五
電話〇二六五(八三三)二二六〇

清水湊

忠高山 實相寺

家康公祖母の旧地

玉桂山 華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八、二、三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪二、八、六九
電話〇六(六七七)〇四四四

謹 賀 新 年
平 成 二 十 四 年

白本尊阿弥陀如来

静岡
宝台院

住職 野上智徳

〒112-0002

東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083

世田谷区奥沢七，四一，三
住職 清水英碩

願行寺住職

佐藤成順

〒140-0004

品川区南品川二，一，一二

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017

世田谷区世田谷四，七，九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38

電話 03 (3404) 8447
ホームページ

<http://www.baisouin.or.jp>

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016
電話 〇四六七(二三) 〇七〇三
FAX 〇四六七(二三) 五〇五一
鎌倉市長谷四，一，二八

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002

文京区小石川四，一二，八

光取寺

大室了皓

〒141-0021
電話 〇三(三三四四) 八三八四
東京都品川区上大崎一，五，一〇

浄土誌上句会

●地

〔特選〕地熱発電湯煙匂う芒原

地下から噴き上げてくる蒸気の熱エネルギーを利用して、電気を起こすものである。この一帯は温泉場でもあるのだろう。野原を歩いていても、湯煙の匂いがする。作者は湯治にでも来ているのだろうか。

石原 新

〔佳作〕黄落や地にべたと蚤の市

齊田 仁

地下鉄の穴に舞いこむ枯れ葉かな

浦田 裕作

大枯れ野風に波打つ地平線

浜口 佳春

●蔵

〔特選〕蔵元の試飲静かに冬に入る

酒蔵である。新米を仕込んでおいたのが、少しずつ醸成されてくる。杜氏はそれをじつと見守っている。冬に入ってもうそろそろと

大西 雄太

思う。ということで杜氏は今、少し口に含んでその具合を見ているのである。

〈佳作〉

焼き芋や灯ともし頃の蔵の町

袴田 阿形

流星や酒蔵匂う町に住む

増田 信子

蔵の鍵仕舞う引き出し冬灯

益山 水虎

●自由題

〈特選〉

秋晴れや地に顎あずけ犬眠る

山口 信子

秋晴れの心地よい日差しに満ちている。庭かどこかの空地だろう。犬が腹も顎もべつたりと地につけて、眠り込んでいる。いかにも安心しきった様子である。「地に顎あずけ」という表現が、しつかり捉えている。

〈佳作〉

屋台から湯気があがりて年の市

町田 俊彦

豊の秋腹突き出してズボン買う

井村 善也

浜人の拾う流木冬用意

さとうゆう



誌上句会 〈編集部選〉

■地

地べたより空へと冬の立つ日かな
 どんぐりのたくさん落ちて地面かな
 この土地にこの地の匂い秋深し
 地響きのして秋麗の鼓笛隊
 地球儀のトンガあたりに冬の蠅
 冬草こども地霊のありどころ
 小春日の地球儀にある点と線
 地に熟柿天突くごとき電波塔
 石路咲けり地上の階に出る途中
 地下茎のごとき親族冬の通夜
 浮かぶものなき秋冷の地平線
 蟬の羽根吸い込まれ行く蟻地獄

西原規夫
 長谷川裕
 濱野具円
 村田 篠
 井口吾郎
 三宅月彦
 山本誠二
 河合美佐子
 今井裕輔
 遠藤耕造
 増田信子
 山口信子

浄土誌上句会のお知らせ

兼題
 季語ではありません

願国自由題

締切・二〇二二年一月二十日
 発表・『浄土』二〇二二年四月号
 選者・増田河郎子（「南風」主筆）
 応募方法

●いづれの題とも数の制限はありません。
 ●特選各1名・佳作各3名
 ●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
 宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

ひとところ落ち葉の溜まる路地の奥 東 保

■蔵

蔵の町小江戸と云うも冬の町
 秋天の半蔵門に突き当たたる
 神無月質屋の蔵に緋縮緬
 一葉忌蔵書に朱印ありにけり
 蔵元のどこかで水の鳴って冬
 色変えぬ松なり兄の蔵書積む
 ぬめぬめと十一月の冷蔵庫
 虫の夜の蔵書の金の背文字かな
 蔵入りて鯨の腹の暗さかな
 冬来たる大蔵省という戦後

森 弘三
 長谷川裕
 小林苑を
 千駄木敏郎
 齊田 仁
 内藤準人
 西原規夫
 村田 篠
 工藤 掉
 井口吾郎

■自由題

坪庭の柿の実一つ映ゆる宵
 我が命あればこそ今魂よ
 晩年や柚子湯に柚子が浮いている
 今朝の冬つやつやとして金隠し
 金色に波打つ丘のすすきかな
 霜月やカーステレオで落語聞く
 落城の後の三寒四温かな
 寒晴のやがて淋しき味酩酊し
 半島のところどころに冬日向
 落ち椿しばらく落ち椿のかたち
 半島にせんべい布団干す男

森 弘三
 飯島英徳
 長谷川裕
 新島 亮
 金井 横
 山内桃児
 森田恵子
 小林苑を
 大島耕治
 齊田 仁
 井草芳郎

編集後記

昇り龍上がつて下がつてそのまんま 岱潤

昨年末に東京の同宗連の仲間と靖国神社の遊就館を訪れた。三月に韓国で歴史博物館を訪れているので、その真逆の価値観にも触れておこうという観点での研修であったが、やがて背筋が凍る思いがしてきた。右翼団体には心地のいい場所かもしれないが、戦争を心からいやだと思ふ私にとっては、国のために死ぬことを美化する言動がしかも堂々と未だに語られている場所があることに恐怖心さえ覚えた。

十一月大阪で知事、市長のダブル選挙が行われ、「維新の会」の橋下氏側が圧

勝した。彼らの思想は政治思想的にみるとヒトラーを模倣したネオナチズムにも似ているとある人が教えてくれたが、既成政党に全く期待ができないと多くの人が思っている今の状況下での、彼らの台頭には注意を払うべきだろう。

生きものには二対六対二の法則があるという。二つの「二」は対極をなし、「六」はどっちか勢力の強い方になびいてゆくという。そして八割になると残りも変わる。たとえば細菌の世界、二割の善玉菌と二割の悪玉菌と六割の日和見菌がいる。日和見菌が善玉菌になびけば腐敗となる。となり、悪玉菌になびけば腐敗となる。二割を維持するのはむずかしい。人間の

世界はどうだろうか。世の中の変化の中で、自分を維持してゆくことができるだろうか。唯ひたすら仏さまの教えを信じ、愚鈍で居続けることは難しい。でもそれを今年の生き方にしたい。(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脇 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

浄土

七十八巻 一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年十二月二十日

発行 平成二十四年一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一 東京港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八 六九四七
FAX 〇三三五七八 七〇三六
振替 〇〇二八〇・八・八二八七

阿弥陀如来の来迎

法然上人の御臨終にあたって、なんともし優しげな表情をした阿弥陀如来が、観音・勢至の両菩薩を従えて来迎してきたところです。この絵図では比較的ゆるやかな角度に描かれていますが、やが

て武士が中心の世となり「死」がより身近なものとなると、雲を長くたなびかせ、急角度の、速度感に溢れた「早来迎」の図が好まれるようになっていきます。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

響流十方こうるじっぽう 其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう 600円(税別)



在庫
僅少

月刊『浄土』 バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版

1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット)500円(税別)



幸浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より